

浄

monthly
jōbu

土

July・August 2003

7.8

合併号

上



昭和18年3月号



昭和18年4月号



昭和18年5月号



昭和18年6月号



昭和18年7月号



昭和18年8月号



昭和18年9月号



昭和18年10月号



昭和18年11月号



昭和19年新年号



昭和19年2月号



昭和19年3月号



昭和19年4月号



昭和19年6月号



昭和19年7月号



昭和19年8月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

仙台

愚鈍院

五却山愚鈍院悟真寺本堂と愚鈍院中村眞
道住職とその長男、蓮光寺中村瑞貴住職





本道は中村眞道住職が昭和四十八年に建立したが、当初から椅子席、無柱、内陣両脇が床の間と想いのこもった特別な作りだった



本尊は阿弥陀如来坐像



仙台観音霊場の第十五番目の観音を祀る観音堂

愚鈍院第二十三世、二十四世
となった中村眞道住職。「あ
とは愚鈍念仏に身をお任せす
るだけだ」と大らかな笑顔を
魅せられた



客殿奥二階にある念仏堂。入り口に
大本山増上寺の第八十六世藤堂恭俊
台下の「愚鈍念仏」の額がかかって
いる

寺宝の一つである善導大師、法然上人の掛軸。
それぞれ発願文、一枚起請文が記されている





境内にあるこつが萱は北限の萱だ

玄関を上がってすぐの「こつがや
文庫」と名付けられた憩いの部屋。



お寺から車で約二十分の葛岡にある
愚鈍院歴代住職の墓。区画整理に関
わる寺院の墓地はこの葛岡にまとめ
られた。



境内の若かりし求道の法然像



浄土

2003/7・8月号 目次

巻頭カラー 寺院紀行 仙台・愚鈍院	撮影=タカオカ邦彦	1
人間に宗教はなぜ必要か	ひろさちや	6
寺院紀行 仙台・愚鈍院	真山 剛	14
表紙のことば	永井健策	23
響流十方	林田康順	24
連載 バリアフリー考	白木 力	28
「代替医療」という世界	井上朝雄	30
会いたい人 富士真奈美①	関 容子	32
連載『梵字』	真野龍海	40
民話をたずねて	石崎敬子〈絵 石川忠夫〉	44
Jフォーラム		55
浄土誌上旬会	選者=増田河郎子	56
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよしろう	59
編集後記		60



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

(株)ティール・マップ主催「みとら」セミナーより

人間に 宗教はなぜ 必要か

第二回

宗教評論家

ひろさちや

一体、宗教というのは何なのかという問題ですが、宗教学者の数だけ宗教の定義があります。つまり、それぞれの学者がそれぞれ「私は宗教というのをこういうふうに定義します」と、勝手に定義しているわけです。

ですから、「宗教というのは一体何なのか」というのは、非常にわかりにくい。そしてその上で、「宗教というのが必要なのかどうか」という問題になってくるわけです。

私は「宗教というものはなければならない」と考えています。そして、人間が宗教を持たなければ、たぶんみんなインチキ宗教にだまされてしまうでしょう。その点についてお話しします。

私は毎年、五十人ぐらいの小学生を相手に仏教の話をしますが、ある年、「君たち、命というのは誰のものだ？」と、子供たちに尋ねました。そうすると、子供はすぐに、活発に答えました。「そんなの、先生、わかってる。命というのは僕のものじゃないか」、「僕の命は僕のものだ」と答えます。

そこで、「あつ、そう」と言つて、小学四年生の小川君という子に、「じゃ、小川君の命は小川君のものだね。それじゃ、聞くけれども、魚の命っていうのは誰のもの？」と聞くと、「それは魚のもんだよ」と言うんです。「じゃ、ゴキブリの命は誰のもの？」と聞いたら、「ゴキブリのもんだ」と言うんです。

「あつ、そう。じゃ、魚の命は魚のものだったら、なぜ君は魚を食べるの？」と聞いたんです。そうすると「先生、お金を払つてるからいいんですよ」と別の子が答えました。

そこで「お金を払っているからいいと言うけれども、お魚さんは一銭もお金をもらつてないじゃないか。漁師がもらつて、お魚屋さんがもらつていて、魚そのものはお金なんか

もらつてないじゃない」と言うと、困つてしまふわけですね。

それで、「じゃ、先生、命は誰のものなんだ？」と子供のほうから聞いてくるわけです。そこで、「命はみんな仏さまの命なんだよ」というように答えたわけです。

しかし、この問題をほったらかしにしておいて、「命つて誰のものなんだ？」と言いますと、今、宗教を持っていない人は、大抵、「仏さまの命だ」という感覚はないわけですね。そうすると、自分の命は自分のものだとなつてしまふわけです。

そうなると、これは恐ろしい結果になつてしまいます。というのは、すぐに命は召し上げられてしまいます。つまり、「命はお前のものじゃないんだ」ということになるからです。戦争中など、私の子供のころ、「お前たちの命はお前のものじゃないんだ。天皇陛下の命なんだ。だから、陛下に命を差し出すのが当たり前だ」となつたわけです。

ですから、「命が私のものだ」と言っていたら、すぐに召し上げられてしまいます。国のものとして取り上げられてしまふわけですね。この辺が恐ろしいですね。

結局、明治時代に、「命は自分のものだ」などというような教育、そういう宗教抜きの教育、あるいは国家神道というインチキ宗教にもとづいた教育をやつていて、その中で徐々に国家権力というものが伸びてきて、「天皇制宗教」と国家神道が一つになつて、私たちの命はうまく召し上げられたわけです。

だから、ある人が言っていますが、戦前の憲法では、「納税の義務」ということで、国民の財産が奪われていく。そして、今度は「徴兵の義務」で命が奪われる。そして、「教育の義務」によつて魂が奪われる。命も魂も国家に奪われてしまったというわけです。

そういうときに、「命は仏さまの命なんだから、天皇陛下の命ではあるものか」という

考え方を私たちが持つていたら、あんなに悲惨な戦争にはならなくて済んだのじゃないか
と思います。

ここで一応考え方の基準をわかってもらうために、仏教はどういう考え方をしているか
ということを、お話ししたいと思います。

まず真ん中に大きな川が流れているという一つの図式を考えてください。川のこつち岸
を此岸といい、向こう岸が彼岸になります。サンスクリット語で言いますと、こつち岸を
「サハ」言います。向こう岸を「パーラム」と言います。

今、私たちが住んでいるのはサハです。しかし、そこにいたのでは本当の意味で問題
解決ができない。真の意味での問題解決ができないから、「あなた方はサハからパーラ
ムに渡りなさい」と教えているわけです。だから、「向こう岸に渡りなさい」というのが
仏教の教えなんです。

そして、「渡る」ということをサンスクリット語で言いますと「イター」となります。
だから、仏教というのは一体何かといえば、「サハ」にいたのではダメなので、パーラム
にイターせよ！」ということになって、ちゃんと語呂合わせができています。これが
仏教の本質なんです。またある意味で、宗教の本質ともいえます。キリスト教などでもそ
ういうふうにかけていると思うってください。向こう岸を「神の国」だと思ってもらえ
ばいいわけです。「人間の世界にいたのではだめだから、神の国に渡りなさい」というのが、
宗教の本質なんです。

さて、中国人は彼岸のサハを音訳、「娑婆」という漢字を当てました。私たちはこれ
を「シャバ」と呼んでいます。つまり、私たちが住んでいる人間世界のことを仏教では「シ

ヤバ」というわけです。

サハーというのはどういう意味かというと、「じつと耐え忍ぶ」ということです。だから、意味を取って訳せば、「忍土」となります。パースムのほうは理想的な世界ですが、こっち側は「忍土」なんです。そううまく人間の都合どおりいかない世界です。暑さ寒さがあって、非常に暑いときには耐え忍ばなければならぬ。冬もそうです。花粉が飛べば、それに耐え忍ばなければならぬ人もいます。

日本人は変に道徳教育をやって「人に迷惑をかけてはいけません」と教えるわけです。

しかし、こんな教えはおかしいんです。皆さんのお子さんにそういうふうにおっしやるのなら、大きな間違いなんです。インド人に話をしていたら、「人に迷惑をかけてはいけません」というのは絶対に言わないそうです。では、どのように言うかというと、「あなたは人に迷惑をかけているんですよ」と言うんです。それが宗教教育なんです。

「人に迷惑をかけてはいけません」と教えると、みんな迷惑をかけているにもかかわらず、「わたしにかけている迷惑はこれだけだ。小さい。しかし、あの人はこんなに大きな迷惑をかけている」となるんです。おなじ迷惑であっても人の迷惑は大きいということで、「ゴミひものもの差し」で物を見てしまうということになるわけです。

しかし、よく考えてみてください。迷惑というのは一体どういうことなのか。例えば、ある人が大学に合格します。そうすると、「おめでとう」と言うけれども、その人が合格したら、誰か一人は落ちているんですね。だからといって「入るな」と言っているわけじゃありません。ただ、私が合格すれば、誰かが落ちています。そうならざるを得ないんです。

道を歩いていると、後ろの人の交通を妨害しているんです。自動車を一台走らせると、やっぱり、渋滞をつくっているんですよ。また、行列に並べば、後ろの人を一人分多く待たせることになります。だから、人に迷惑をかけているんですよ。

ですからインドでは、子供たちに本当の宗教教育として「あなたは人に迷惑をかけている。それを人さまから許してもらって、生かされているんだから、あなたもまた迷惑を耐え忍びなさい」と教えるわけです。これが本当の宗教教育なんですよ。

ところが、日本では、「迷惑をかけるな」となりますが、そうすると、自分がかけている迷惑の度合いみたいなものはかり始めるわけです。それがおかしいわけです。

ですから、インド人は、「私たちが生きている世界は、人に迷惑をかけずには生きられないんだ。ということは、人の迷惑を耐え忍んで生きるしかないんですよ」ということを言っているわけです。だから、そういう主張を込めて「忍土」と呼んでいるわけです。

ですから、この世の中では問題を全部解決できないでしょう。こっち側の世界では問題を解決できないから、パーラムに渡りなさいと教えているんです。「渡る」というのは「イター」ですから、「パーラム・イター」になるわけです。

この最後のMとIが一緒になると、どうなりますか。「ミ」になります。そうすると、「パーラムイター」と言ったら、わかりますね。中国人がこれに当て字をしたのが「波羅蜜多」となると、頭に「般若」をつけて、「般若波羅蜜多心経」となるわけです。

「般若」というのは智慧という意味なんです。この「智慧」というのは「仏の智慧」だと思ってください。実は私たちはこの世の中でみんな知恵を持っています。こっち側で言っている知恵というのは何かというと、「損得の知恵」ということになります。どうしたら

得ができるか、どうしたら損するかという損得の知恵です。一つのお菓子を「兄弟で半分こして食べなさい」と言うと、どっちが大きいかといって、何ミリグラムの差まではかろうという、そういう損得の知恵です。私たちはそういう知恵は持っているけれども、損得を超えた仏さまの智慧でもって、向こう岸に渡るようにする必要がありますが、実は、渡れるはずがないんです。それができるのは仏さまだけです。本当に悟りを開いた人だけです。日本には高僧がたくさんいますが、ほとんどが無理ですね。

ですから、私たちは渡る必要はないわけです。渡ろうとすると、普通ですと川ですから、泳いで渡らなければなりません。泳いで渡るためにはどうしないといけないかというと、裸にならないといけない。重い財産を背負っては渡れない急流です。また、家族を連れては渡れません。ですから、家族もみんなこっち岸に残して、真っ裸になって、自分一人で泳いで渡るほかにいわけです。そういう仏教が小乗仏教なんです。「みんな出家しなさい」と言って、自分一人渡ろうとするという仏教なんです。

そうすると、こつち側での憂き世の問題というのは、全部悩まないで済むわけです。「子供が学校に行かなくなつた」といって悩む必要はありません。子供を捨てているんです。女房にぐぐだ言われる必要ありません。一人自由になつていけるわけです。

しかし、そういう渡り方じゃだめだということで、大乘仏教ができました。「自分一人さえ渡ればいい、という渡り方で渡つても仕方がない。そんな渡り方なら渡るな」と教ええました。

それではどうすればいいのかというと、「般若で渡りなさい」ということなんです。つまり、実際に渡らなくてもいいんです。しかし、私たちは向こう岸の般若の智慧でもって

こっち側を見るようにすればいいわけです。

向こう岸からこっち側を見よう。そうすると、どう見えるか。それが大乘仏教の考え方なんです。渡ることが難しいのなら、渡らなくていいんです。しかし、向こう岸から見ればどう見えるだろう。その向こう岸の智慧というものを確立しよう。向こう岸の視方をしようということなんです。

仏さまから見たら一体どう見えるのか。例えば、戦争中は、世の中の役に立つ人間というのは、人殺しができる人間だったんです。最近、イラクで戦争がありました。人殺しができる人が、平和に貢献したということになるんです。戦争をやっておいて平和に貢献したというのは、みんなおかしいことだと思っんです。これらはみんなこの世の中の物差しですね。

それをお釈迦さまは、「仏教の物差しは向こう岸の智慧で見てごらん。ちよつと違ふよ」とおっしゃったわけですね。不登校の子供がいる。学校に行けない子供がいる。それを、「行きなさい。行きなさい」というのはこっち側の知恵なんです。そして、カウンセラーなどが言っているのは、どうしたら学校に行くようになるかという知恵を、一生懸命教えているんです。科学などというのも全部こっち側の知恵なんです。

(つづく)

寺院紀行

仙台

愚鈍院

撮影／タカオ力邦彦

文／真山 剛



愚鈍院山門。開かれたお寺ということから左右の塀は中が覗けるようになっている。さらにこの塀をより中が見えるような塀に作り直す予定だ

「うちの住職、『伊達の殿様』なんて呼ばれるのですよ」愚鈍院住職夫人の晴子さんの明るい笑い声が応接間に響く。

インタビュ어도二日目、最後に浄土宗の宗政に話が及んだ時だった。数年前から足の具合が悪くなり歩行器を使う住職に影のように寄り添う晴子さんは、取材にも同席をしてくれていた。

「浄土宗の宗会議員や増上寺の執事をさせていただいていたのですが、住職は夢や理想ある人で、しかも頑固なところがありますからね」

この奥様の話に愚鈍院二十三、四世となる中村眞道住職はにこやかに笑っている。その笑顔が実に優しい。笑顔といえば、この取材で多くの住職に話を聞いてきたが、こちらがこんなにかわされたのは中村住職が初めてだった。それこそインタビューのつけからである。

中村住職は今回訪れた愚鈍院の隣の成覚寺で生まれた。長男である中村住職が成覚寺を継ぐのが普通だが、体の弱い弟に生まれ育った寺で過ごせるようにとその席を譲り、自分は戊辰戦争以来住職がいなかったこの愚鈍院を復興させる道を選んだ。

事前取材で調べていたが、確認の意味も含め、出身のお寺の話を尋ねると、それこそ上を向きながら「さあ？」である。宗派は違うが今東光という有名なお坊さんがいたが、その風貌を思わせる少し



愚鈍院の縁起が書かれた寺宝の巻物。開山上人が念仏道場として開いた経緯が詳細に記されている。

強面の威厳のある住職がまさかお茶目だとは思わない。思わず心の
中で、「あれ、間違いない筈なのに、いや、どうしよう」と戸惑った
と、それを見て愉快に笑い始められるのである。

その笑顔に住職の茶目っ気によく気づいたのだが、二日間、
何度も笑わされたインタビュートなった。

「一生童心」、大正大学児童教化研究部で活躍をされていた住職の
座右の銘の一つがこの言葉。愚鈍院の境内に北限となるかやの木が
立っている。こつぶがやという木で、昔は近所の子供と一緒にその
実を食べたという。そうしたことあつて、客殿の玄関をあがった
ところに「こつぶがや文庫」と名付けた読書と語らいのための部屋
がつくられている。「子供が大事だね」と何度も話されたが、それ
は机上の事だけでなく、住職が実際に子供たちと触れ合ってきた経
験からの言葉であり、子供心が住職の中に生き続けている。

この中村住職が隣の成覚寺からこの愚鈍院の住職に入ったのが、
昭和二十四年。檀家数、百二軒で、しかも百年近くも住職のいない
お寺だった。境内は草ぼうぼうで、現在の本尊が祀つてあつた持仏
堂が唯一の建物だった。そのお堂も天井に穴のあいた茅葺きで、近
くの人が堂守しているようなお寺だったという。とはいえ、宝暦年
間に建てられたそのお堂は伊達藩の城代家老の持仏堂だけに釘一本
もない造りのいい建物で、由緒ある愚鈍院の面影は残してしたとい

伊達政宗が隠居後の若林城を築城し
た地は現在宮城刑務所となっている



伊達政宗亡きあとの徳川家康との攻防を想定し、
戦場を見渡せる拠点になるはずの岡は仙台城の
候補地だった。現在は榴ヶ丘公園となっている



う。またそこにお祀りしてあった阿弥陀如来坐像は作者は不明ながら室町時代の作風のもので、現在の本尊になっている。

さて、仙台駅から東南、寺町、新寺（旧新寺小路）の寺院が建ち並び通りにある愚鈍院は慶長七（一六〇二）年に南町通り（現仙台駅構内）に建立された。開山上人は良りよ薩さく上人で、袋中の名で知られる良定上人の法弟である。東北に浄土宗を広めたのは金光上人で、その基盤の上に名越派開祖の尊観上人が念仏信仰をさらに強いものにしたのだが、名越派の僧侶は良の字を冠するが、二人とも良の字がついている。

この良薩上人は学僧として有名で、天正年間に伊達政宗が帰依、米沢時代の成覚寺中興開山となった。その時、上人は正宗からの三百石の寄進を断っているが、その後、成徳寺十六世となった上人を正宗が手元と呼び寄せ悟真寺（後の愚鈍院）を建立させた時も三十石の寄進を断っている。そこで、正宗は近隣の武家百四十軒を檀家とさせている。それぐらい念仏弘通に力を注いだ上人で、寄進断る人柄を慕って集まる僧侶の研鑽道場としてその歴史は始まった。そして寛永年間に現在地に移転した。現在新寺と呼ばれるこの一角には二十余の寺院が並んでいるが、周辺の寺院が寄せ集められ、寺町となったのである。それまでの青葉城を核とした町割りで北山五山を中心にした寺町があったにもかかわらず、なぜ新しい寺町が作



中村眞道住職は愚鈍院の隣の成覚寺の長男だったが、弟に譲り愚鈍院に昭和二十四年に入った

られたのか？ それは伊達藩のこういう不安からだった。

戦国武將の雄、伊達政宗は天下取りの実力と器量を持ちながらも、徳川の臣下に甘んぜざるを得なかったが、いつもその動向を徳川は気にしていた。いよいよ政宗が隠居を迎えるにあたり、政宗存命中はともかく、亡き後には徳川が伊達藩を武力でも取り潰しに来るだろうと予想していた。そこで、そうなった時には戦場となるであろう平野を想定した城と城下町を築いたのである。

現在の宮城刑務所の地に政宗は隠居のための若林城を築き、そこを中心に新しい町並みが作られた。新寺は戦場を見渡せる小高い岡と城の間に位置しているが、敷地の広い寺は戦の時にはいろいろな用途に使える利点もあったからである。そして、その周辺には鍛冶町、鉄砲町、三百人町といった町名の町が今も残っている。

幸い政宗亡き後に徳川と伊達藩に争いが起こる事はなかったが、新寺はこうした伊達藩の事情から生まれた町なのである。その新寺が大きく揺れた事件が起きた。時は下り、昭和二十年代後半から始まった仙台市の区画整理にともなう墓地移転がそれである。春子夫人が嫁いで来たのは昭和二十七年だが、当時は墓地移転反対運動の署名の最中で、中村住職が反対運動の先頭に立っていた。

昭和二十年代から三十年代、仙台市は革新市長で、登記されていなかった新寺小路（当時）の寺院の墓地を葛岡に移転し、新たな区

昭和三十年から始まった愚鈍院などのある新寺（旧新寺小路）の区画整理は二十年に及ぶほど紛糾した。最終的には葛岡に墓地がまとめられ、それぞれの別院が建てられた

最後に残った区画が愚鈍院の墓地となったが、いまでは頂上付近の見晴らしのいい場所となった



本堂脇の位牌堂。
お膳の出し入れを
今はお孫さんも手
伝ってくれるとい
う



客殿二階の客間。
窓からこつぷ管が見える



中村住職が親友である矢吹照夫浄土宗顧問并
護士から贈られた掛軸。宗教学者矢吹慶輝先
生、増上寺八十世大島徹水台下が昭和十二年
正月、鎌倉黒光庵で遊び戯れに記したものだ

画整理を市は計画していた。それに対して、登記の有無はともかく、それこそ伊達の殿様、政宗公以来の伝統ある寺の墓地である。たかが数十年の市が何を言うか、と新寺の寺側が相対したのである。歩み寄りのないまま墓地の所有問題にまで発展し裁判沙汰になる中、寺側は浄土真宗の国会議員に陳情するため何度も東京まで赴いた。しかし、双方の言い分は平行線、紛争はこじれにこじれ、あつという間に十数年の月日が流れた。

このままでは裁判が最高裁に、こうした中、反対運動の中心だった中村住職は百八十度方向転換をする。「仏につかえる者が争い事で身をやつしている……」そんな思いから今度は和解運動の先頭に立つ。仏教連盟を組織し区画整理の委員長になるのだが、手の平を返す形となる中村住職についてくるお寺は少なかった。浄土宗のお寺と愚鈍院に隣接する曹洞宗妙心院だけだった。とはいえ、時間とともに墓地移転、区画整理に賛成するお寺が増えていく。

昭和四十五年、ようやく移転と区画整理が決着をみることになる。「区画整理の委員長ですから、自分の愚鈍院は後回し。お寺の区画も墓地の場所もそうでした。ですから愚鈍院は表通り側の角地がないでしょう。墓地も最後に残った山頂付近、これは今では逆がいい場所になりましたけど。住職は立场上、皆さんを優先していました」二十年近い仙台市との係争は何はともあれこうして解決をみた。



葛岡の墓地に立つ水子供養のお地藏さま。愚鈍院の向いには産婦人科があるが、県の産婦人科医会の方々と共に供養を続けてきている

この係争以前からお寺だけではやっていけない事もあり、お寺以外に仕事に就いていた住職だが、さらにいろいろな役職におされることになる。

そうした中、本堂の復興を迎える。時に昭和四十八年のことである。以来それまで続けてきた愚鈍院の各種会合がより活発になる。

婦人会、青年会、写経会、詠唱会、そして朝粥会など、長いものでは四十五年もの歴史がある。新本堂は無柱、当初から椅子席、脇陣は床の間、というユニークなもので、随分研究して作った空間が檀家さんをはじめ地域の人たちからも好評を博したのだった。また山門両脇の塀は胸の高さより上が縦だけの格子になっていて中が覗けるようになっていたが、良隣上人以来の念仏道場として広く皆さんにお寺に来てもらうためのアイデアの一つである。少々古くなったその塀が今度立替えられるが、さらに境内が見やすくなるという。

誰でも入り易いお寺への工夫は塀だけではない。境内の庭の中央あたりに小さな童形の誕生仏と両菩薩、そして小さな鐘が並んでいる。小さな子供の目線で作られたものだ。山門の向かいにある産婦人科に来る母子の憩いの場になればと最近作ったもので、可愛いベシに親子が並んで座れる。

こうした多くの人に開かれたお寺を目指すには住職の、いや「伊達の殿様」としてのこうした信念が裏付けになっている。



境内にある誕生仏と観音、勢至菩薩像と鐘。子供たちの目線に合わせて作っている。

「今の坊さんは贅沢、なんのかんのいっても充分生きていけるのだから、世間にお返しをしなければいけない。ここに気づかなければ仏法に生きているとは言えないな」

さて、こうした住職の姿を見て育った長男、中村瑞貴さんは現在、蓮光寺の住職をされている。仙台市内だが、町はずれの田んぼの中にあるお寺でこちらも無住時代が長くつづいていた。檀家数も数えるほどこのお寺ながら、いろいろなことを始めている。瑞貴住職は東北から初めて全国浄土宗青年会の理事長に選出された行動派で、あたかも中村住職が荒れていた愚鈍院を復興させたように、檀家とのつながり、地域とのつながりを大事にしながらの寺創りに取り組んでいる。

その瑞貴住職には奥様の彩子さんとの間に男の子が三人いる。眞道住職が命名した龍樹くん、悟眞くん、そして瑞道くんだが、親子三代が法要の時に姿を現すのを檀家さんは何よりの楽しみにしているという。もちろん子供好きの眞道住職も孫たちの衣姿に目を細めているのは言うまでもないが、その住職が最後に五十年の住職歴を振り返りこう言った。

「良薩上人がたくさん残してくれたものを、今時間をかけて拾っているようなものだね」

たとえ拾い残しがあっても、ご子息やお孫さんが忘れずに拾ってくれるに違いない。

(ルポライター)



山門脇の鐘

生

心象書道

永井健策

生(い)きるということの大きさを感じています。

生(は)えるも同様です。

生きると生えるも、決して強くはないけど、それでも大きなことのように感じませんか。

何故かそれと接することで、本当に生命を流せるような気がしています。

私はそんなことを感じたものだから、何故かうれしくなって「生」という字をこの様に画いて見ました。

(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

生まれては まづ思ひ出ん ふるさとに
契りし友の 深きまことを

法然上人 「元久二年十二月の詠歌」

阿弥陀さまのお浄土に往生したならば、故郷であるこの娑婆世界で、必ずやお浄土に往生しようと思ひを結び、共々にお念仏にこそしんできた友人たちの深いまことの心を真つ先に思い出し、お浄土で叶えられる「俱会一処」の喜びを分かち合いたいものである。

あなたと私、いついつまでも

書店に足を運ぶと臨死体験や退行催眠療法の臨床研究の成果をふんだんに盛り込んだ書籍がうずたかく積み上げられています。もちろん、両者とも科学的な検証が一〇〇％なされたわけではありませんし、そんなことは今後也不可能でしょう。それにもかかわらず、なぜこれらがこれほど多くの人々の関心を集めるのでしょうか？ 少し整理してみる必要があります。

臨死体験は、その多くが共通しているといえます。第一に幽体離脱。病院の一室で最期を迎えている自分の姿を肉体から離れた自分自身が外から見ている。医師が「ご臨終です」といい、家族が「ワァー」と泣き崩れていくありさまの一部始終を見聞きしているのです。第二にトンネル現象。トンネルのような真つ暗な世界を通り抜けていく。第三に、これは文化的背景により幅があるようですが、トンネルをくぐり抜けた先で、神さまのような方に出会ったり、今は亡き家族や友人に再会したり、あるいは、花園のような場所や明るい光に遭遇したりするそうです。つまり、こうした臨死体験を積み重ねた臨床研究とは、死後の世界の存在を肯定し、「この、今、意識している私」が何らかの形で死後もあり続け、ともすると、今は亡きへか

けがえのない大切なあの方」と再会することもできるのだという確信を抱かせる契機となっているといえましょう。

次に退行催眠療法。退行催眠とは、医師が患者の心の傷を治療する時に用いる催眠術の一種です。例えば、大人になっても水が怖くて顔も洗えない方がいる。本人には、その原因がまったく思いつかない。そういう場合、医師は退行催眠を施して「水が怖くなってしまった原因まで遡ってください」とお願いする。すると患者は、それこそ幼い時に何かのきっかけで溺れかかった体験を話し始める。その原因に応じて医師は治療を施すのです。大方は、その原因が判明するだけで症状は大幅に回復するそうです。

書籍で取り上げられるのは、そうした退行催眠療法の輪廻転生版です。通常の退行催眠では患者の心の傷まで辿り着けなかった医師が「とにかくあなたが水を怖がる原因の生じた時点まで遡ってください」と告げると、その患者の年齢をはるかに超えた自身の過去世での原因を話し始める場合が少なからずあり、その内容も、患者が決して知り得ない情報をスラスラと、しかも正確に話し始めるといいます。

例えば「○○という国に住んでいた○○という名前の私は、○○年に○○船が難破して溺れ死んでしまった。その時の心の傷が現在の私に及んでいます」などと。そして「その時、私の××（両親・夫婦・子供・友人など）であつた○○は、今は（今も）私の××（両親・夫婦・子供・友人など）である○○です」とまで言いきるそうです。後で調べてみると、実際にその○○という箇所がすべて事実だということです。つまり、こうした退行催眠療法を積み重ねた臨床研究とは、この、今、意識している私は何らかの形で過去にも生を享けており、そればかりか、現在の関係とまったく同じではないけれども自分自身を取り巻く〈かけがえない大切なあなた〉との関係は、一代限りではなく、過去世から連綿と続いてきた（そして、今後も続いていくであろう）関係なのだという確信を抱かせる契機となつてゐるといえます。こうした臨死体験や退行催眠療法を経験された方々に共通するのは、みな一様にそれからの人生を前向きに、実に生き生きと過ごすようになるといひます。いかがですか？「俱会一処」の喜びが語られる法然上人のお歌は、冒頭の疑問を見事に解いてくれそうです。

合掌（天正大学講師・林田康順）

連載

「バリアフリー考」

第2回（全6回予定）

文／**白木カ** バリアフリーデザイン研究会事務局長
一級建築士／インテリアプランナー

写真／**丸山カ** バリアフリーデザイン研究会会員
歩行者・電車空間デザイナー

選挙 と 投票



いつも投票所になるこの小学校では、会場の体育館の入口にベニヤで作られた作りの悪いスロープを見かける。少しの段差が気になっている。

阪神淡路大震災で国内がゆれたのは、1995年。多くの被災者が出た。あのときに気になったのが、避難所の状況だった。送られてくるテレビの画像に釘付けになりながら見守ったものだ。次第に現地の状況がわかるにしたがつて、その悲惨な状況が明らかになった。車いすの人やお年寄りにとってトイレを始め、その環境は過酷を極めた。

時間が経つと忘れてしまうが、一番の避難所になった学校の整備は、まだまだ現在も遅れている。多くの地域で緊急時の避難所は、小学校、中学校等の公的な施設だ。このような緊急時に、いつも犠牲になるのがお年寄りや障害者である。その犠牲の程もマスコミなどでは伝わってこない。バリアフリー化が整備されていれば防げるケースも多いが、同じようなことが現状でも懸念される。早急な点検が必要だ。

さらに学校などは選挙のときに、投票所と

して使われる。だから、なおさら気にかかる。投票所のバリアフリー化については、多くの地域でも同様にかなり遅れている。投票所は、学校や市民センター、お寺などだったりする。簡易な手作りのスロープで済ませたり（写真参照）、人的な力で車いすを抱え上げたり対応は、まだまだ場当たり的だ。投票所自体が、多くの自治体で選挙管理委員会の管轄でない点も問題を複雑にしている。教育委員会だったり、市民局だったり、宗教団体だったり与管理者は場所によって違う。改善はその管理者が責任を持つ、選挙が来るたびに、またシツコク改善を呼びかけたい。

地域をそして国を変えるためには、選挙で一票を投じることが一番の近道だ。選挙権の行使はことさらに重たい。各地域の選挙管理委員会はもつと強く、その責任を受け止めなければならぬ。ハードにもソフトにも、そろそろメスを入れて欲しいものだ。

「庭」と「庭師」と

「管理人」

CAMUNet / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

前回、「全体的」を意味する「ホリスティック」ということばを紹介しましたが、このことばを冠につけた「ホリスティック医学」という考え方があります。簡単に言えば、病気や病巣だけを見るのではなく、人間を「身体・精神・霊性の統合体」として丸ごと見よう、近代医学だけでなく代替医療も積極的に使っていこう——というもので、始まりはアメリカ。一九七八年に「米国ホリスティック医学協会」が設立され、日本でも遅れること十年、八八年に「日本ホリスティック医学協会」がつくられています。

そのアメリカでの設立時のエピソードとして興味深い話が、わたしたち代替医療利用者ネットワークの副代表である上野圭一さんの近著「補完代替医療入門」（岩波アクティブ新書）に書かれていたので、今回はそれをち

よつとご紹介します。

全米ホリスティック協会の発起人たちは入会してくるメンバーに、こう呼びかけたのだそうです。

「われわれは修理工ではなく、庭師になろう」

つまり、ここでは近代医学を「分子機械としてのからだの故障を直すもの」であり、医師をそれを行なう修理工になぞらえているわけですが、では、医者が庭師になるというのはどういうことなのか。

基本は「からだ」の認識です。われわれのからだというのは物質でできた、精密につくられている機械ではなく、神・宇宙・自然といった人間よりはるかに偉大な何者かから無償で貸し与えられた「庭」のようなものである、という比喩的な見方です。

この考え方は、キリスト教的な身体認識でもあるらし

いのですが、したがって、わたしのからだはわたしの所有物ではない。時期がきたらその偉大な何者かにお返ししなければならぬ。そこにおいて、「わたし」とは、いつかくる返却日までの間、その「庭」を、そこに生育する樹木やさまざまな植物などを、健康に保つことを務めとして与えられた「管理人」ということになります。庭を健康に保つには日々の手入れが大切です。水や肥料をやり、雑草を取り、害虫を駆除し、枝を払い、落ち葉を掃き清めるなどの営みがなされないと庭は荒れてしまいます。

そんなもの、最初から庭師にまかせればいいじゃないか、という人もいるでしょうが、からだという庭だけはそのはいきません。なぜなら呼吸・飲食・運動・排泄・睡眠など、からだを健康に保つための基本的なことは管理人しかできないことだからです。これを言い換えれば、「わたしの健康は、まずわたし自身の日々の生活のあり方にある」というきわめて当たり前のことなのですが、そこにおいてホリスティックな医師である庭師にできることは二つしかありません。

ひとつは管理人に適切な日々の庭仕事のやり方を指導すること、もうひとつは管理人の手に負えなくなるほど荒れてしまいそうな、あるいは病んでしまった庭に対し

て、専門家として助言し、再生のために専門的な腕を振るうことです。

ただし、再生していく力の本体は庭そのものが持っているものであり、庭師はその力が発現しやすいように補助するものでしかありません。その再生する力のことを自然治癒力といい、代替医療の基本的な立場もまた、患部ではなくからだ全体に働きかけ、からだ自身が備えている治癒力を賦活させることにあるのです。

しかし、そう考えると現代人の多くは管理人としての仕事を怠っているように思えてなりません。ふだんはジャンクフードを平気で食べ、運動もせず、睡眠時間を削って不規則な生活をし、それらのツケはビタミン剤や栄養補助食品を摂ることでよしとしている。あるいはテレビなどで「××に効く」と紹介される食べ物や健康法、健康器具に飛びついて、二、三日ほど試してみる。その結果、どこかちよつと具合が悪くなると、修理工である医者のところへ駆け込んで、「何とかしてくれ」とすがりつく……。

「庭」「管理人」「庭師」というホリスティックな医療観・健康観は、医療者の側はもちろんですが、わたしたち医療消費者の側にも、いま大いに必要なことではないでしょうか。

連載

会いたい人
関 容子

富士真奈美

さん
①



撮影／タカオカ邦彦

オペラを観ているとき、ミラノにいてもウィーンにいても、眞奈美さんは今どうしているかな？ とふと思う。なぜだろうと思ったら、『魔笛』の三人の魔女とか、『ニーベルングの指輪』の三人のラインの乙女とかの中に、たいてい眞奈美さんに似た人が混っているからだだった。それほど眞奈美さんの顔立ち日本人離れしている。

岸田今日子、吉行和子、富士眞奈美の妖艶三女優が仲のいいのは近ごろ有名だが、私はかなり前から今日子さん、和子さんの順に個別に親しくなり、あるとき偶然オペラの会場でお二人に眞奈美さんを引き合わされた。オペラと眞奈美さんが条件反射のように結びつくのは、そのせいもあるかもしれない。

「あら、日本人離れと言ったって、父は修善寺の人で母は三島の人。伊豆の血以外は一滴滴も入っていないわよ（笑）。父の実家は修善寺ではよく知られた大地主で、七人兄弟の末っ子。だから親子ほど年の違うお兄さんにお妾

さんがいて当り前、といった生活に反撥して、青年らしい正義感から左翼運動に走っちゃったの。何度も親が警察に行っては、裏で取引きして連れて帰ってきてたみたいよ。結局ロマンチストだったのかしらね。大学に行くと称して上京して、音楽学校へ行って、ヴァイオリンなんか弾いてた。口語体の短歌も作って『憂鬱な若葉』という歌集も出してるの。二十一、二のころ、手痛い失恋をしたらしくって、悶々として一人旅してたようね。

逝く春の午前一時は悔しいな

薔ざしり囁んで棄てられてゐる

ね、ちよつと啄木調というか、俵万智調とか（笑）」

眞奈美さんの音楽好きも、俳句の腕前が玄人はだしなのも、そして人並外れて正義感が強いのもみんな父親ゆずりなのだろう。

ついこの間、吉行和子さんから聞いたのだが、雑誌のグラビアの仕事で後楽園の庭園を眞奈美さんと二人で歩いていたら、向うから

女性の腰を抱きかかえるようにして歩いてくる初老のカップルとすれ違った。和子さんは別段批難する気は起きなかったが、真奈美さんは「はしたない」と眉をひそめ「いい年をして遠慮というものを知りなさい」と文句を言ったそうだ。

「まあ、私はかなり父親似よ。眼とかおでことか天然パーマとかまで。父は苦味走つたい男で、ちょっとハンフリー・ボガードみたいだったの。甘ったれ坊やだったらしくて、小学校へは爺やがついて行って、その爺やが教室の窓の外から見えないと泣いてうちに帰っちゃうような子供だった。母は一人娘で、父親が鉄道省につとめてたからやつぱりお嬢さん育ち。その二人がお見合いをして、父がハンサムだったから一ぺんで決っちゃったんですって。でもね、いつ椅子から父が立ち上るのかしら、と思ってたら、もう立ってた（笑）。背はあんまり高いほうじゃなかったわね。そこも似ちゃったの」

真奈美さんの美点は、女優に珍しく自分を

笑いのタネにできること。いつかも、スペインで日本料理屋を経営している新宿「どん底」の元マスターが久々に帰国し、真奈美さんがタクシーを降りて喜んで駆け寄るサマをこう評された、と笑っていた。

「毛皮のコート着てたからね、タクシーから巨大な毛糸の球が転がり落ちてきたのかと思った、ですって。ひどいじゃない、これって」そんなことは言っても、平成六年に沢田研二と共演した『かもめ』（チューホフ）のアルカジーナ役は堂々とした大女優の貫録だったし、平成八年、十年のミュージカル『42nd STREET』（フォーティーセカンドストリート）では、歌も踊りもさることながら、その花やかな美貌がひととき目立って舞台映えした。

「真奈美っていう名前はね、今でこそ結構同じ名前の若い人がいるけど、私以前にはどこにもないと思う。文学青年だった父が万葉集から取ったんですって。



19歳。『文藝春秋』秋山庄太郎撮影

足引の山さはびとの人さには
麻奈といふ子があやにかなしき
人はたくさんいるけれども『まな』という
娘がどうにもいとしい、つてこと？」
万葉集巻十四相聞の表記によると、「安志
比奇乃 夜尔砂波妣登乃 比登佐波尔 麻奈
登伊布児我 安夜尔可奈思佐」とある。
「私以外の真奈美さんに訊くと、父が富士さ
んのファンなので、つてたいてい言うわね。



20歳。たった一枚の水着写真



松竹映画「つむじ風」渥美清さんと

それで、姉の名前は静しずか、次の姉が仁子よしこ、誰も読めないの、これ。私が三番目で、また女だというんで非常おくがっかりされちゃったらしくて（笑）、母は申しわけないから里子に出します、と言ったら、父が優しい人で、そんなこと言わないでお前、よく見てごらん、メリー・ピックフォードみたいに可愛いじゃないか、うちで育てよう、ってたしなめてくれたんですって。でも次に弟が生まれたらあんまり嬉しくて祖父が名前つけて進、その下の弟は光人みつひと、それからまた娘が生まれて環たま。これは母がソプラノ歌手の三浦環が好きだったから」

やはり真奈美さんの名が断然ユニークだ。その真奈美さんは三島市茅町かや生まれだが、父親が当時新聞記者だったので、転勤で東京、滝野川区（現在の北区）へ引越し、六歳までをそこで過した。飛鳥山のすぐ近くで、目の前が渋沢栄一郎。広大なお屋敷の塀がどこまでも続いていたのを子供ごころに憶えている。

「私の家はお屋敷の前の借家（笑）。昭和十九年に祖父が亡くなって、私たちの一家が三島に戻って住みつくことになったんだけどそれが天の助けで、そのあとすぐに東京は大空襲。直撃でやられた人もずいぶんいたというところよ。この三島と沼津の間の清水村というところは、東洋一の湧水量だというきれいな水が泉のように湧いて流れる柿田川で有名な村なの。私はそこで清水小学校に入学して十二年間いたわけだけど、村の子供はモンペ姿で学校に通ってたのに、母は私に手編みのセーター着せて、短いスカートにハイソックスなんて目立つ格好をさせるものだから、たちまちいじめられた。それに父親がかけるとき、あなた、ハンカチ持った？　なんて母が大きな声で言うのをいじめっ子に聞かれちゃって、『あなたの家』とか言われてね。でも私もたちまち田舎になじんだけどね」

母親は村に一台しかないようなシンガミシンを持っていて、セルの袴をほどこいて可愛いスカートを作ったり、コティの口紅を塗っ

たりする（ただしのちの眞奈美さんが塗る半分以下の濃さ）するお洒落な人だった。

「母は、父が左翼なものも、大酒飲みなのも知らずに結婚したの。父は酔うと歌うのよ。それも、古き都を来て見れば 浅茅が原とぞ荒れにける 月の光は隈なくて 秋風のみぞ身には沁む……なんて、藤原実定卿の歌に勝手に節をつけて歌ってた。私はそういう歌があるのかと思ってたら、父が作ったのね、音楽学校出の人だから。声はよかったわよ。最後は大伴旅人みたいに酔い泣きするの（笑）」

眞奈美さんも父の愛唱歌を聞き覚え、昔の歌をよく知っているものだから、高校生のころには、「あなたいくつなの？」とよく訊かれたそうだ。

「両親の弟への溺愛は大変なもので、私とは並大抵の差別じゃなかったわよ。私が五つ、弟が三つのときにおなかをこわして、疫病えびりになって死にかけたの。そしたら父は無神論者のはずなのに、神仏に祈ったんですって。男の子はやつと授かった宝ものですから、連

れて行くならどうか女の子だけにしてください、って。女の子って私のことよ（笑）。

この話をのちに母から聞いたときにはものすごくミジメになって、自分が可哀そうだった。でも母があんまり面白そうに話すんで、ま、いつか、という気になったわね。そういう父も結核で、五十二歳で若死にして、母は八十九歳まで生きたけど、うちの二階に来て泊ってても、弟が可愛いからすぐ三島に帰っちゃうの。帰るとなると突然帰る帰ると言い出すので、私が赤いジープを運転して三島まで送ってくんだけど、母は夫が早く死んだから、長男が夫みたいなのなのね」

そう言えば吉行あぐりさんにとつての長男淳之介に対する感じも同じだった、と前に和子さんから聞いたことがあったっけ。

眞奈美さんを芸能の世界に結びつける基盤となったのは、中学と高校の二人の音楽教師との出会いだった。

「中学二年のとき、シューベルトみたいな風



18歳。「週刊朝日」表紙。小磯良平先生のモデル

貌の元テノール歌手という先生が東京から椰子の実みにたいに流れ着いたの。何か理由があつて将来の夢を中断された、つて感じ。アル中なのかお酒の匂いがして、悲しげで、教室ではいつもジリーの『星も光りぬ』のレコードをかけて、窓の外のレンゲ畑やタンポポの咲いてる田園風景をぼんやり眺めてるの。私はそれですっかりオペラのトリコになっちゃったのね。だってジリーは歌い終ると慟哭するんだもの。こんなドラマチックな歌い方もあるのかと、ショックを受けたものだった。

高校に入ったら担任が芸大出のソプラノ歌手で、東京では長谷川京子（のちの伊藤京子）さんの伴奏なんかもなさった方だったの。オーディリー・ヘプバーンみたいな美人で、声がよくてピアノがうまくて素敵な先生。私がオペラが好きとわかったら、当時としては珍しかったからすごく可愛がってくれて、レコードや譜面も貸してくださったから、私は『椿姫』や『蝶々夫人』のアリアの譜面を写して、そこに仮名を振って、原語でおぼえちゃった

のよ」

『蝶々夫人』の中の有名なアリア「ある晴れた日に」が、将来真奈美さんの花やかなデビューにつながるのが、この話はまたのちに。『私の舞台経験は、中学の文化祭で『赤い靴』というドラマを自分で書いて、踊れもしないのにバレリーナの役をやったのが最初。映画の『赤い靴』を見て感動した結果の産物よね。

高校の文化祭のときは、服部正さん作曲の『真間の手児奈』というオペレッタふうの作品を、芸大の初演に先立って私たちで上演したの。

私は二人の男に求愛されて悩んで、入水して死んじゃう手児奈の役なんだけど、今でもまだあの歌はおぼえてるわよ」

真奈美さんがよく響く声を抑え、高校生の昔に戻ってその一節を聞かせてくれた。

「水の底に低く 我を呼ぶ声響くよ 波にゆらぐ玉藻は手を差しのべて招くよお……つて、ほらね」

連載『梵字』②

日本語アイウエオは

仏教の

梵字から

真野龍海

ア



イ



ウ



エ



オ



梵字はインドの言葉ですから、日本語ではない文字や、多少発音が出来ない文字もありますが、日本語にに合わせて、ここに示しました梵語の文字順によって、日本語のアイウエオを作りました。

梵語のさらにその源は、インド・ヨーロッパ語と言われて、ヨーロッパとアジアの間くらいの地域にあったようです。従って英語・ドイツ語フランス語などと同じ系統です。その証拠には梵語の中には、それらの国語と似た言葉があるのにつきます。

ところが、日本語は、言葉としては別系統です。それで、梵語にない語もあれば、日本語では使わない梵語も多くあります。もちろん、それで、日本語にある文字（ゴチック文字で示しました）を、梵語の中から順番に拾っていったら、日本語の文字表、つまりアルファベット表を作りました。

悉曇(シットン)梵字 字母表(アルファベット)

母音					
21 Ga ンガ	20 gha ガハ	19 ga ガ	18 kha カハ	17 ka カ	喉音
26 Ja ニャ	25 jha ジャ	24 ja ジャ	23 cha チャ	22 ca チャ、サ	歯音
31 Na ナ	30 Dha ダハ	29 Da ダ	28 Tha タハ	27 Ta タ	舌音
36 na ナ	35 dha ダハ	34 da ダ	33 tha タハ	32 ta タ	歯音
41 ma マ	40 dha タハ	39 ba バ	38 pha パハ	37 pa パ、ハ	唇音
	45 va ヴ	44 la ラ	43 ra ラ	42 ya ヤ	半母
49 ha ハ	軟吹 気音	48 sa バ	47 Xa サ	46 Sa シャ	硬吹音
	52 hUM フウ		51 kXa クシャ	50 llaM ルラ	重字

母音					
6 U ウー	5 u ウ	4 I イー	3 i イ	2 A アイ	1 a アイ
12 aH アハ	11 aM アム	10 au アウ	9 o オ	8 ai アイ	7 e エ
		16 LI リー	15 L リ	14 Q リー	13 R リ

普通はNo.52は表示されないが、梵字では、「ン」をあらわす時、文字の上に点、または、半月形の上に点を打って、「ン」と表すことを言う。カタカナの「ン」に通ずるようである。

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替001802145231

この表は梵語のアルファベット表ですが、この中から、日本語に関係のある文字を順々に拾いだしていきました。その順をわかりやすくするために、ゴチック文字にしておきました。梵字の中、若い番号から作られています。場本では1「ア」、3「イ」、5「ウ」、7「エ」、9「オ」、子音では「カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ヤ、ラ、ワ」の順で、梵字表でも、17「カ」、22「caサ」、32「タ」、36「ナ」、37「ハ」、41「エオ」ができたのです。そういえば、私どもはこの表を覚えるのに、アカサタナハマヤラワ

ンとくり返しましたが、このことをもう一度表にすると次の如くです。日本文化の基礎ともいべきアイウエオが仏教の僧侶の智慧で、その伝統の梵字の学問、修練の中から生み出されたことは特筆すべき事です。このことはアイウエオを学ぶ時は幼少の故か、それとも教師自身も知らぬ人が多いのではないでしょう。もう一つのアルファベットの「いろは」は比較的よく了解されているようですが、共に日本語の基礎が、仏教、僧の智慧で築かれているわけです。この基礎文化に合掌です。

梵字の字母表による日本語字母表

母音	1 a ア	3 i イ	5 u ウ	7 e エ	9 o オ
子音	17 ka カ	ki キ	ku ク	ke ケ	ko コ
	22 ca sa チャ、サ	si シ	su ス	se セ	so ソ
	32 ta タ	ti チ	tu ツ	te テ	to ト
	36 na ナ	ni ニ	nu ヌ	ne ネ	no ノ
	37 pa パハ	pi ヒ	pu フ	pe ヘ	po ホ
	41 ma マ	mi ミ	mu ム	me メ	mo モ
	42 ya ヤ	yi イ	yu ユ	ye エ	yo ヨ
	43 ra ラ	ri リ	ru ル	re レ	ro ロ
	45 va ヴワ	vi ゐ	vu う	ve え	vo お
	52 hHM フクシ	n () ン			

民話
をたずねて

連載

ヘソの下

石崎敬子



SHI
KIKAWA

絵・石川忠夫

とんとむかし

あるところに、おとうと娘が暮らしておったと。

ある日、おとうが隣の村に行こうと山越えをしよったら、ポツリポツリと雨が降りだしたそうなの。

「こりや、いかん」

おとうは山道をかけ出したが、だんだんに雨は強くなり、目の前がかすんで見えなくなるほどであつたそうなの。そのうえ、雷まで鳴り出し、バリバリと大きな音がしたと。

「うへえー」

おとうは耳を両手でふさぎ、大きな杉の根元のうろに走り込んだそうなの。

「くわばら、くわばら、助かった」

ふところから手ぬぐいを取り出し、濡れた頭を拭こうとした途端、ピカッピカッピカッと稲光が光り、ゴロゴロドシャーンと大きな音がして、目の前に太い火柱が立ったと。

「ひえー」

おとうは悲鳴をあげるなり、その場で気を失ってしもうたと。

それからどれほどたったか、ふと気がつくど、どうじゃ、あれほどの大雨もやみ、陽が射しておったと。

「おお、ひどい目にあつた。どうやらへソも無事だし、そろそろ行くとするか」

へソのあたりをひと撫でたおとうは、杉のうろから這い出したそうな。てくりてくりと歩いておると、なんと道の真ん中で、雷が這いまわりよつたそうな。たまげたおとうが、

「雷さん、どうしたね」

と声をかけると、雷は、

「さつき大雨を降らしたら、杉やら檜やらがえらい喜んでの。それでもっと降らしちゃろと思うて、力まかせに雨降り太鼓を叩きよつたら、う、足元の雨雲を突き破つて落ちてしもうたんじゃ。いやはや痛うて痛うてのう、立ち上がれんのよ」

と、腰をさすりさすりしたと。

「それは難儀じゃのう。雷さんよ、わしに手伝えることがあるじゃ

ろか」

「そんならすまんのう、わしをそこの神の木に押し上げて登らしてくれんもんかいのう。そしたら雷の神通力が出て空へ戻れるがじや。地上では神通力がさっぱり出んのじや」

こう言うて、雷はペコリペコリと頭を何度も下げたそう。おとうは、雷がちくつとかわいそうになつて、

「あい、わかつた」

と、近くの大きな神の木に、よつこらしよと雷を押し上げてやつたそう。雷は、初めはソロリソロリと木を登つておつたが、神通力が戻つたのか、そのうちガツガツと力強く登りだしたと。

木のてっぺんまで登つた雷は、

「おとうよ、おおきに。二、三日したらお礼に行くからな」

と言うと、頭の前からピカツと稲妻を出し、尻からはゴロゴロと音を出して、天に帰つていったと。

それから、三日ほどたった夕方のことじや。おとうが、山仕事から戻つてみると、娘が待ちかねておつたそう。



「おとうよ、今日のう、見たことのない男の人がうちへ来よったぞ」

「ふーん、誰じゃるか」

「わしは雷やが、三日ほど前に、このおとうに助けてもらうたきに、お礼に来た、って、この重箱をおいていったんよ」

そう言うて、娘は黒塗りの立派な重箱に目をやったと。

「おお、そうか、そうか。雷さんが礼に来たか」

おとうは嬉しくなり、どれどれと重箱のふたをとってみた。一の重にはぼた餅がずっしりと詰めてあつたそう。そのぼた餅のうまそうなこと。さつそく二人はぼた餅を頬張つたと。

「うまいのう、こんなぼた餅は初めてじゃ」

「うん、うまい、うまい。おとう、次の重はいったい何じゃろな」

今度は、娘が二の重を開けてみた。二の重には、小芋やら豆やらキノコやらの煮物がいっぱい入つておつたそう。さて、三の重はと見ると、こりやまたなんと、ヘソがいっぱい並べてあつたと。出ベソ、へっこみベソ、たてベソ、うずまきベソ、大きなヘソ、ちよんまいヘソ、まがつたヘソやら、どのヘソも煮てあつたと。

おとうは、すっかり感心して、

「いやあ、雷さんは、人さまのヘソをとって食うと言うが、こんなにまあたくさんのヘソをようも集めたもんじゃのう。そりやそうと、へその重の下はなんなら、早う開けてみいや」

と言うたら、娘は、

「なんぼおとうが言うたって、へその下は見せるわけにやいかん」と、顔を真っ赤にして、プンプン怒りながら部屋を出ていったそうな。

むかしまつこう、さるのつぺ、ぎんごろぎんごろ。

平成十五年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世

中村康隆

大本山増上寺
法主

成田有恒

大本山金戒光明寺
法主

坪井俊映

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山清浄華院
法主

大田秀三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

大本山善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

浄土宗宗務総長

水谷幸正

大本山増上寺執事長

江口定信

〒105・0011 港区芝公園四・七・三五

浄土宗東京事務所長

袖山榮眞

〒380・0865 長野市西後町一五六八 十念寺

〒154・0017 世田谷区世田谷四・七・九

大吉寺

住職 成田昌憲

暑中お見舞い申し上げます

平成十五年

平成大事業
御影堂屋根替大修理完成
阿弥陀堂新築今秋完工予定

美作
誕生寺

〒709-3802 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八)二二〇二
FAX 〇八六七 (二八)二二六二

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山
實相寺

〒420-0839 静岡市鷹匠二丁目二十四番十八号

玉桂山
華陽院

電話 〇五四 (二五) 三六七三
FAX 〇五四 (二五) 三六五六

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長 **佐藤良純**

淑徳学園中学校・高等学校
校長 **大谷壽雄**

塩釜市雲上寺

東海林 良雲

浄土宗大願寺住職
浄土宗議会議員

神谷英敏

正覚寺

住職 **江藤英賢**

〒915-0813 武生市京町二・一・八
TEL 〇七七八 (一一) 一三一九
FAX 〇七七八 (一一) 六一一七

宗議会議員

河本眞龍

〒758-0054 萩市枳屋町四二
電話 〇八三八 (二二) 一五八七

宗議会議長

熊谷靖彦

佐賀教区本應寺

〈浄土宗の宗教協力と
国際貢献を推進しよう〉
宗議会議員

小田義海

佐世保仏教連合会会長・九品院住職
佐世保市大和町一八八・一

弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

大蓮寺

〒371-0022 前橋市千代田町三・三・二四

孤峰山 蓮馨寺 客殿落慶御礼
宝池院 吞龍上人奉祀

糸原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0032 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三五八三)三八二〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院 住職
こつぶがや文庫主

中村眞道

〒984-0061 仙台市若林区新寺三・二二・一七
電話〇二二(二五六)六〇五七

宗源寺

齋藤价洲

〒110-0015 台東区東上野五・一・六

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町一八・一四
電話〇二三八(二二三)〇五七四

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三二
電話〇四八(五四二)〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254-0066 平塚市立野町六・五
電話〇四六三(二二二)二六三八

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二・一六・二二一
電話〇二六六(五二二)一九七〇

〒112・0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如來

西方寺

〒989・323 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三九九)二〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: saihouji@johg.or.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

九品阿彌陀如來

淨眞寺

〒158・0083 世田谷区奥沢七四一・一三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140・0004 品川区南品川二・一・一二

梅窓院

住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・一・二八
電話〇四六七(二二)〇七〇三
FAX〇四六七(二二)五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evamine.jp/tenkoin>
ryumano@venus.dtlnc.jp

光円寺住職

佐藤良純

〒112・0002 文京区小石川四・一二・八

横浜

大光院

www.daikoin.com

浄土宗東京教区教区長
光取寺

大室了皓

〒141・0021 品川区上大崎一・五・一〇
電話〇三(三四四)八三八四

戒法寺住職

長谷川岱潤

〒141・0021 品川区上大崎一・九・十一



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〈特選〉

行く春や子に踏まれいる土踏まず

井村 善也

●土

風呂上がりだろうか。子に足の裏を踏んで

もらっている。疲れが取れてきて、眠気を覚

えてきそうである。「踏ませいる」なのだろうが、

原句の方が気分に合わせているように思う。一

字の違いだが大きい。

〈佳作〉

川底に蟹が穴掘る土煙り

河合富美枝

故里の土つけ筍とどきけり

細田 初枝

土かけの若き僧侶の夏衣

石原 新

●火

〈特選〉

蚊遣り火のぼつりと暮れてゆきにけり

平井美津子

仕事をしていてか客があつてか、蚊遣りを

焚いたのを、そのままにしていたのだ。暮れ

てゆく中に、その火がぼつと残っているのを

〈特選〉

昼寝覚めゆつくり畳む新聞紙

四方

遵

●自由題

見たのである。夏の夕方のゆったりした時間が、ここにはある。

〈佳作〉

火櫓を惹きみつつ茶を点つる

金谷 友江

言い訳の聞き役梅雨の桐火鉢

片桐てい女

焚火して帰漁待ちいる嫁若き

加藤 政男

寝ころんで新聞を読みかけたまま、寝入ってしまった。目覚めたあとその新聞を畳んでいるのだが、頭はまだ完全にはこの世の状態ではない。「ゆつくり畳む」が、それらを如実に表している。

〈佳作〉

リハビリに手筋やわらげ春炬燵

浦田 ちあ

硝子器に残る指あと花ぐもり

園田 郁子

灰汁すててさらす蕨のみどり濃き

北川 弘子



参加作品 編集部選

土

埋め立ての土管に遊ぶ夏の潮

増田 信子

雑草を抜けば土の香夏の庭

堀 菅子

鍬入れて土盛りあぐる茄子畠

金谷 友江

朽ちてなを土匂ふなり古寺の夏

大場 清

夏近く土手に溢るる子等の声

中島富士子

農は土つくることより蚯蚓殖ゆ

片桐てい女

田起しの土の匂ひを五月風

中島 一子

夏場所や力士の一念土不着

嶋田喜代子

土埃匂ひ残して驟雨去る

山本美代子

風うけて素足で走る土の上

今井 恵子

火

護摩の火や一隅照らす夏の闇

大場 清

濃き野火の香を負ひ犬の返し来し

中島富士子

大花火終わりに解けし警備の輪

細田 初枝

棟上を火打で送る卯月かな

嶋田喜代子

坪庭の蚊遣火匂う夕餉時

浜口 佳春

自由題

晚鐘の訝に割れてしやばん玉

片桐てい女

ローカル線停車の長き春の昼

細田 初枝

春日傘お宮参りの列つづく

加藤 政男

知らぬ顔増えて漁村の子供の日

増田 信子

浄土誌上句会のお知らせ

◎季語ではありません

友砂

自由題

締切・七月二十日

発表・『浄土』二〇〇三年十月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねッ

2かい目

かまちのふしう



山川家の人々



虹・レインボー



編集後記

茄子の牛仏壇の前を独り占め 岱潤

東京の寺院では最近、施餓鬼会の説教の前座に落語の囃家をお呼びすることが多くなっている。私の寺もそれに乗じた訳ではないが、家内の友人が若い落語家と結婚し、上演の機会をもらえないかとの話もあり、応援の意味もかねてお願いすることにした。その囃家と当日の題目の相談で打ち合わせをしたとき、現代日本人の落語離れの深刻さを感じたと伺った。

テレビ番組から古典落語の放送がなくなり、若い人たちは落語という「笑点」の大喜利だと勘違いする人までいるそうだ。また落語のオチをだじやれと間違えている人も多く、古典落語の面白さを知る人は少ない。

確かにオチを理解し、笑いつながらることは若い人には難しく、それなりの文化の理解力が必要となる。

たとえば「三年目」という落語がある。仲むつまじい夫婦の奥さんが亡くなるとき夫は約束をする。「もし後妻を迎えるようなことがあれば、その結婚式の晩に幽霊として現れて後妻を追っ払っておくれ」と。しかし三年目の晩まで死んだ女房は現れなかった。もう子供もいる夫は女房に今頃来てと言うと、死んだ女房は「だってお通夜の晩にみんなして私の頭を剃り上げてしまふものだから、髪が伸びるまで出てこれないじゃないか」と。確かに今の若者には難しいかもしれない。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

六十九巻七八月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

平成十五年 六月二十日
平成十五年 七月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五・〇〇一一

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八 六九四七
FAX 〇三三・五七八 七〇二六
振替 〇〇一八・八・八二八七

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

株式会社 シーティーイー

真野龍海
佐藤良純



昭和19年12・1月号



昭和21年3月号



昭和21年4月号



昭和21年6・7月号



昭和21年8・9月号



昭和21年10月号



昭和21年11月号



昭和21年12月号



昭和22年2月号



昭和22年4月号



昭和22年6月号



昭和22年9月号



昭和23年1月号



昭和23年9月号



昭和24年新年号



昭和28年正月号

法然上人鑽仰会の

本



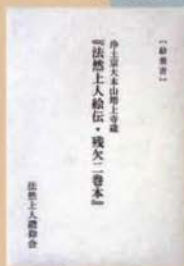
※額装寸法 47 × 59 cm



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法話抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれて
おりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036